

---

# お菓子な家

アマノン ジャック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お菓子な家

### 【コード】

N5870M

### 【作者名】

アマノン ジャック

### 【あらすじ】

昔々、在る所に双子の子供が居ました。彼らはなんと実の親に棄てられてしまったのです。

(前書き)

キャラ崩壊注意

「お兄ちゃん、私お腹が空いた。」

「グレーテル、僕は何も持ってないよ…我慢して。」

どれくらい歩いただろうか？親に棄てられた双子達は宛もなくただ歩いていた。

「…お兄ちゃん、私もう歩けない！お腹が空きすぎて力が出ないよ

…」

「…そんな事を言われても…ん？」

ヘンゼルは辺りを見回す。何処から甘い匂いが漂っている。

「グレーテル…もう少し歩こう？此方に甘い匂いがする。」

ヘンゼルは匂いのする方向を指差す。

「本当？」

「うん。さあ、行こう？」

甘い匂いに惹かれた双子達は、やがて小さな家を発見する。それは…

「わあ！凄いお菓子の家だ！！」

グレーテルが目を輝かせながら兄に話す。

「チョコ、ケーキ、キャンディ…何だか虫歯になりそうな物がいっぱいだね…。」

ヘンゼルはお菓子の家をやや関心しながら喋る。

「誰も居なさそうだね…留守かな？」

ヘンゼルが家の周りを見回す。家から人の気配はしない。

「私、もう我慢出来ない！食べよう、お兄ちゃん！！」  
「え？」

ヘンゼルの顔が見る見るうちに青ざめていく。

「どうしたの？」

「…僕が甘い物、苦手なのを忘れたかい？」

ヘンゼルが口を抑えて吐き気に堪える。お腹を空かせた妹の為に自分は我慢して此処まで連れてきたのだ。

「ふ〜ん、じゃあ私だけで食べるよ？」

「ど〜ぞ…」

「えへへ。どれから食べようかな？」

お菓子の家の上機嫌のグレーテルはポストの形をしたチョコから食べる事にした。

「コレにしようー！じゃあ、いただきます〜。」

ポストをかじりつくグレーテル。しかし…

「…不味い。」

「グレーテル？」

妹の異変に気付いた兄が妹に駆け寄る。妹は真顔で…

「…この無駄な甘ったるさ…チョコを嘗めてるのかしら？ある程度の苦さが無いと駄目ね。香りもカカオ豆の風味を殺した添加物だし…それにこの舌触り…一度溶けて再度固まったのね。テンパリング…艶を出す作業を怠ってるわ…あら？よく見ると白い所もあるし、ブルーム現象が起こってるじゃない！」

グレーテルは先ほどまでの子供らしい可愛さとは対照的に今ではすっかり料理に五月蠅い小姑のように毒舌になっていた。

「グレーテル、落ち着いて…」

ヘンゼルが妹を制する。だが妹は兄を無視し次のお菓子に口を運ぶ。ちなみに苺のショートケーキだ。

「…生クリームの混ぜ方が足りないわ！キメ細かく角が立つくらいにしないと…砂糖も入れすぎだし、スポンジも半生じゃない。ちゃんと竹串刺して確認してないわね…コレ。小麦粉もキッチンと奮ってないせいでダメが出来てるし…だいたい、重曹を入れれば良いってもんじゃないわよ。入れすぎて苦いのよね…重曹に頼りすぎるからいけないのよ。メレンゲでやれば、フワツと仕上がるのに…苺も、何コレ？萎びてるし。酸っぱいし。小さい…！」

グレーテルの勢いは止まらず、次なるお菓子へ狙いを定める。

「…プリンには茶碗蒸しみたいにするのが基本…こんなゼラチンに頼った物など私は認めぬ！それにゼラチンを使うなら少量の水でふや

かしてから熱い内に入れないと、ゼラチンだけの所があつて気持ち悪いわ。卵も入れるタイミング間違えたのかしら？卵だけが固まつてる所もあるし。ソースも煮詰めすぎね。確かに苦いのは好きだけど…これは度を超してる。しかも焦がしすぎて黒いし、鼈甲飴みたいに固いし…」

グレーテルはそこまで言つて家の扉の前で…

「これを作つたパティシエを出せ！責任者出てこい！！」

「グレーテル！マジで落ち着け！！此処、人の家だから！迷惑だから！！」

ヘンゼルが大声出す妹の口を手で塞いだ。グレーテルは兄の口を塞ぐ手が不快らしく噛み付いてきた。

「イタツ！」

「邪魔をするな！私は怒っているのだ！！」

「…でも、グレーテル。作つた人だつて趣味だろうし…」

「うるさい！趣味にしても料理下手に程がある…こんな全国のパティシエに失礼だ！！」

グレーテルは超が付くほど料理にうるさいのだ。そのせいで両親はノイローゼになり、子供達を棄ててしまったのだ。

（グレーテル、もう少し自制してくれ…）

兄であるヘンゼルはそんな妹を反面教師にして育つた。だが、顔が似てるせいで両親はグレーテルだけでなくヘンゼルも棄てたのだ。

（何で、僕までこんな目に遭うんだろ？）

それはきつと君が自制しすぎてるからでは？

(はあく、家に帰りたい。)

「これ、お前達。人の家の前で何してる？」

軽く現実逃避していたヘンゼルに老婆が声掛けた。

「あ、すいま…」

「ほう、貴女がこの家のパティシエか？」

謝ろうとしたヘンゼルをグレーテルが遮った。

「ばていしえ？何だい、それは？」

「パティシエも分からないとは…まあ、問題はそこじゃないから良いとして…」

グレーテルは老婆を指差し…

「悪いけど、貴女の家のお菓子を食べさせてもらったわ…残念ながら全く誉められた物じゃないわね。」

「人の家のお菓子食べるときながら…何言ってるんだい！」

老婆が怒る。当然の事だが…

「貴女、これはキッチンと料理本を見ながら作ったの？」

「そんなの見なくても作れるわい。」

「そう…なら、ちゃんと量った？」

「量りなんて目分量で十分じゃ！」

「焼き加減は？」

「表面さえ焦げ目が付けば…」  
「もう良い…」

グレーテルは老婆の言葉を遮り…

「貴女、料理作る資格無いわ。」

「何じゃと？」

「料理の事を何も分かってない！普通、量ったり本を見てからしない？慣れてるなら良いけどド素人が誤った判断して事故や食中毒になるのよ？」

「…そんな。」

「本当よ。例えば、ケーキが爆発したり…」

「それは、滅多に無いんじゃないか？」

ヘンゼルがグレーテルに横槍を入れる。

「滅多に無いけど、兎に角。料理を作りたいのなら貴女の場合は誰から教わってからしなさい。」

「…教わると言われても此処は儂しか住んでおらんし、どうすれば

…」

「ああ、それなら大丈夫。」

ヘンゼルは嫌な予感がし忍び足でその場を去ろうとするが…

「何処に行くの？シエフ？」

「いや、勘弁して。」

こうして、老婆はヘンゼルから料理を習い今では立派な“ばていしえ”とやらになりましたとさ。

めでたしめでたし。

(後書き)

作者は料理に詳しくないし下手くそです。単語は思い付いたのをW  
ikiで調べてから書いてるので多分間違えてないと思います。(  
表現は兎も角)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5870m/>

---

お菓子な家

2010年10月8日22時42分発行